教科書との対応（中学一年）

三省堂『現代の国語1』p.134～137「故事成語――矛盾」
光村図書『国語1』p.170～174「今に生きる言葉」
東京書籍『新編 新しい国語1』p.156～「矛盾」
教育出版『伝え合う言葉 中学国語1』p.128～132「故事成語――中国の名言――」

次の訓読文は、『韓非子（かんぴし）』にある話である。読んで、あとの問いに答えなさい。（①～⑤は文の番号）

①楚人有鬻盾与矛者。②誉之曰、吾盾之堅、莫能陥也。③又誉其矛曰、吾矛之利、於物無不陥也。④或曰、以子之矛、陥子之盾、何如。⑤其人弗能応也。

（『韓非子』による）

（注）楚＝昔の中国の国の名。誉めて＝ほめて。堅き＝かたい。陥す＝突き通す。子＝あなた。応ふ＝答える。能はず＝できない。

問一 ①の訓読文を、返り点にしたがって読む順番に、漢字を書き並べなさい。

問二 ①の訓読文を、書き下し文に直しなさい。

問三 ②には「之」の字が二つある。書き下し文での書き方として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　二つとも、漢字の「之」のまま書く。
イ　一つめは漢字の「之」のまま書き、二つめはひらがなの「の」に直す。
ウ　一つめはひらがなの「の」に直し、二つめは漢字の「之」のまま書く。
エ　二つとも、ひらがなの「の」に直す。

問四 ③の「於物無不陥也」を、書き下し文に直しなさい。

問五　「於」は、多くの漢文では読まない字（置き字）として使われる。③の文の「於」についての説明として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　置き字なので読まず、書き下し文にも書かない。
イ　「おいて」と読み、書き下し文では「於いて」と書く。
ウ　読むが、書き下し文ではひらがなで「おいて」と書く。
エ　レ点がついているので、文の最後に読む。

問六　③の「無不陥」の意味として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。（レレ）

ア　何も突き通すことができない。
イ　突き通すかどうかは、物によってちがう。
ウ　突き通さないものはない。（どんな物でも突き通す。）
エ　突き通さないほうがよい。

問七　⑤の訓読文を、書き下し文に直しなさい。

問八　次の語を現代仮名遣いに直し、すべてひらがなで書きなさい。

a　曰はく（いはく）　b　応ふる（こたふる）　c　能はざる（あたはざる）

a

b

c

問九　次の語の意味として最も適切なものを、あとのア～カからそれぞれ一つずつ選び、記号で答えなさい。

a　利なる（③）　b　或ひと（④）　c　何如（④）

ア　するどい　イ　役に立つ　ウ　ある人　エ　あなた　オ　どうなるか　カ　なぜか

a

b

c

問十　次は、①・②と⑤の現代語訳である。［a］・［b］に入ることばを、aは二字、bは六字で書きなさい。

楚の国の人で、盾と矛とを［a］者がいた。（その人が）盾をほめて言うことには、「私の盾のかたいことといったら、突き通せるものはない。」と。（③・④は略）その人は答えることが［b］。

a

b

問十一　④の「陥穽（サバ）」（陥さば）の意味として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　突き通したので　イ　突き通したら　ウ　突き通しても　エ　突き通さないで

問十二　この話から生まれた故事成語「矛盾」の意味として最も適切なものを、次から一つ選び、記号で答えなさい。

ア　強い者どうしが争うこと。
イ　つじつまが合わないこと。
ウ　攻めと守りを両方そなえていること。
エ　自分の物を大げさにほめること。

解答と解説

故事成語基礎① 矛盾（韓非子）訓読・書き下し・語句

訓読と書き下し

問一 楚人盾矛与鬻者有

【根拠】①の返り点。「与」にレ点と一点（一レ点）、「鬻」に二点、「者」に上点、「有」に下点がある。【読み方】返り点のない「楚」「人」「盾」を上から読む。「与」はレ点なので、下の「矛」を先に読んでから「与」に返る。「与」には一点もついているので、続けて二点の「鬻」に返る。次の「者」には上点がついているが、上点の字はそのまま読んでよい（返り点は「どこへ返るか」の印で、上点・一点の字は順に読む）。最後に下点の「有」に返る。【まちがえやすい点】「有」を二番目に読んでしまうまちがいが多い。下点のついた字は、上点の字まで読み終わってから読む。

問二 楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り

【根拠】①の返り点と送り仮名（ニ・リ・グ・ト・ヲ）。【読み方】問一の順番に読み、送り仮名をひらがなにしてつける。「与」は日本語の助詞「と」にあたる字なので、書き下し文ではひらがなで「と」と書く。「与」の送り仮名「ヲ」がそのあとに続き、「矛とを」となる。【まちがえやすい点】「盾与矛」をそのまま漢字で「盾与矛」と書くのはまちがい。「有」は動詞「有り」なので漢字のまま書く。

問三 イ

【根拠】②の一つめの「之」には送り仮名「ヲ」がつき、「之を」（これを）と読む。二つめの「吾盾之堅」の「之」は、「盾の堅きこと」の「の」にあたる。【読み方】書き下し文では、日本語の助詞・助動詞にあたる字（之＝の、不・弗＝ず、也＝なり、与＝とな ど）はひらがなにする。「これ」と読む「之」はものを指すことば（代名詞）なので、漢字のまま書く。【まちがえやすい点】同じ字でも、読み方と働きで書き方が変わる。「之」を見たら、「これ」なのか「の」なのかを、送り仮名と前後から確かめる。

問四 物に於いて陥さざる無きなり

【根拠】③の後半。「於」「無」「不」にレ点がある。【読み方】レ点が続くときは、下から一字ずつ返る。読む順は「物→於→陥→不→無→也」。送り仮名をひらがなにし、「不」は打ち消しの「ざる」、「也」は「なり」とひらがなで書く。【まちがえやすい点】「不」を漢字のまま「不る」と書いたり、「也」を「也」のまま書いたりしない。「於」は送り仮名「イテ」がついているので、この文では読む（問五）。

問五 イ

【根拠】③の「於」には送り仮名「イテ」がついている。【読み方】「於」は、送り仮名がなく場所・相手などを示すだけのときは置き字として読まない。この話のように送り仮名がついているときは「おいて」と読み、書き下し文では漢字のまま「於いて」と書く。「物に於いて」は「どんな物に対しても」という意味。【まちがえやすい点】ア：「於」はいつも置き字、と覚えているとまちがえる。送り仮名があるかどうかで決める。ウ：漢字のまま「於いて」と書く。エ：レ点は「すぐ下の字を読んでから返る」印で、文の最後に読むという意味ではない。

問六 ウ

【根拠】③「吾が矛の利なること、物に於いて陥さざる無きなり」。【読み方】「陥さざる（突き通さない）」ものが「無き（ない）」と、打ち消しが二つ重なっている（二重否定）。打ち消しが二つ重なると、強い肯定になる。「突き通さないものはない」は、「どんな物でも必ず突き通す」ということ。【まちがえやすい点】ア：打ち消しの字が二つあるので「できない」と読んでしまうまちがい。「不」と「無」の両方を順に訳してから、意味をまとめる。

問七 其の人応ふること能はざるなり

【根拠】⑤の返り点と送り仮名。【読み方】レ点が二つ続くので、「応」から「能」へ、「能」から「弗」へ、一字ずつ返る。読む順は「其↓人↓応↓能↓弗↓也」。「弗」は「不」と同じ打ち消しの字で、ここでは「ざる」とひらがなで書く。「也」も「なり」とひらがなにする。【まちがえやすい点】「弗」を漢字のまま書くまちがい。打ち消しの「不」「弗」は、書き下し文では必ずひらがな（ず・ざる など）にする。「応ふること」（こたうること）の送り仮名もぬかさない。

問八 a　いわく　　b　こたうる　　c　あたわざる

【根拠】書き下し文の送り仮名は歴史的仮名遣いで書かれている。【読み方】語の頭以外の「は・ひ・ふ・へ・ほ」は「わ・い・う・え・お」に直す。a「いはく」→「いわく」。b「こたふる」→「こたうる」。c「あたはざる」→「あたわざる」。【まちがえやすい点】bを「こたえる」と、今のことばに言いかえてしまうまちがい。仮名遣いを直す問題では、ことば自体は変えずに、かなだけを直す。

問九 a　ア　　b　ウ　　c　オ

【根拠】a③「吾が矛の利なること」は、盾の「堅きこと」と並べて矛のよさをほめている。b④「或ひと曰はく」。c④「子の盾を陥さば何如」。【読み方】a「利」は刃物がよく切れること。矛は突く武器なので「するどい」。b「或ひと」は「ある人」（名前のわからない人）。c「何如（いかん）」は「どうか・どうなるか」と、ようすや結果をたずねることば。【まちがえやすい点】aを「役に立つ（便利）」とするまちがい。ここでは武器の性質をほめている。cを「なぜか」とするまちがい。理由をたずねるのは「何故」。bを「あなた」とするのは、④の「子」の意味とのとりちがえ。

【一文ずつの対照】（白文／書き下し文／現代語訳）

①楚人有鬻盾与矛者／楚人に盾と矛とを鬻ぐ者有り。／楚の国の人で、盾と矛とを売る者がいた。

②誉之曰、吾盾之堅、莫能陥也／之を誉めて曰はく、「吾が盾の堅きこと、能く陥すもの莫きなり。」と。／（その人が）盾をほめて言うことには、「私の盾のかたいことといったら、突き通せるものはない。」と。

③又誉其矛曰、吾矛之利、於物無不陥也／又其の矛を誉めて曰はく、「吾が矛の利なること、物に於いて陥さざる無きなり。」と。／また、その矛をほめて言うことには、「私の矛のするどいことといったら、どんな物でも突き通さないものはない。」と。

④或曰、以子之矛、陥子之盾、何如／或ひと曰はく、「子の矛を以て、子の盾を陥さば何如。」と。／ある人が言うことには、「あなたの矛で、あなたの盾を突いたら、どうなるか。」と。

⑤其人弗能応也／其の人は答えることができなかった。（教科書によっては「盾」を「楯」と書き、送り仮名が少しちがうこともある。）

問十 a　売る　　b　できなかった

【根拠】a①「鬻ぐ」。b⑤「能はざるなり」。【読み方】a「鬻ぐ（ひさぐ）」は「売る」という意味。盾と矛を「ほめて」いるのも、品物を売るための宣伝である。b「能ふ（あたふ）」は「できる」、「ざる」は打ち消しなので、「能はざるなり」は「できなかった（のである）」。【まちがえやすい点】bを「できる」「しなかった」とするまちがい。「しなかった」は自分から答えなかったことになるが、本文は、答えようとしても答えられなかったことを表している。

問十一 イ

【根拠】④「子の矛を以て、子の盾を陥さば何如」。【読み方】「陥さ＋ば」のように、「ば」の前が「さ（ア段の音）」になっている形は、「もし～ならば」という仮定を表す。或ひとは、まだ起きていないこと（実際には突いていない）を「もし突いたら、どうなるか」とたずねている。【まちがえやすい点】ア：「陥せば」なら「突き通したので・突き通すと」の意味になることがあるが、ここは「陥さば」。ウ：「～ても」の意味なら「陥すとも」などになる。

問十二 イ

【根拠】②の盾のじまんと③の矛のじまんは、④の問いで同時には成り立たないことがわかる。【読み方】故事成語の意味は、話の結末から考える。結末（⑤）は「答えられなかった」で、その原因は二つの言葉が両立しないこと。ここから、前後や二つのことがらのつじつまが合わないことを「矛盾」というようになった。【まちがえやすい点】ア：矛と盾が戦ったわけではない（実際には突いていない）。ウ：「矛（攻める）」と「盾（守る）」の両方を持つ、という字面だけで考えたまちがい。エ：商人がじまんしたのは話のきっかけで、ことばの意味の中心ではない。

【テストに出るポイント】

- 読む順番：①「楚→人→盾→矛→与→鬻→者→有」（上下点と一レ点）。⑤「其→人→応→能→弗→也」（レ点が続く）。
- 会話の範囲：「曰はく（言うことには）」が会話の始まり、「と」が終わりの目印。②・③は鬻ぐ者、④は或ひとのことば。
- ひらがなにする字：之（の）・与（と）・不／弗（ず・ざる）・也（なり）。「之を」の「之（これ）」は漢字のまま。
- 読む「於」と読まない「於」：送り仮名「イテ」があれば「於いて」と読む。送り仮名がなければ置き字。
- 二重否定：「陥さざる無し」＝突き通さないものはない＝どんな物でも突き通す。
- 「陥さば」＝もし突き通したら（仮定）。「何如」＝どうなるか。
- 故事成語「矛盾」＝前後や二つのことがらのつじつまが合わないこと。例「早く寝ると言いながら、夜中までゲームをしているのは矛盾している。」のように、言っていることとしていることが合わないときにも使う。

【もっと知ろう】『韓非子』では、この話のすぐあとに「夫れ陥すべからざるの盾と、陥さざる無きの矛とは、世を同じくして立つべからず。」（突き通すことのできない盾と、どんな物でも突き通す矛とは、同じ世の中にいっしょに成り立つことはできない。）と続く。韓非は、昔の中国ですぐれた王とされた堯と舜の二人を、両方ともほめたたえる人々の考えを批判するために、この話を使った。

【使い方の例】

- 「自由に意見を言ってよいと言いながら、反対の意見が出るとおこるのは矛盾している。」
- 「計算で出した長さと、図の長さが矛盾しているので、どこかでまちがえている。」
- 似た意味の言い方：「つじつまが合わない」「食いちがう」。反対の意味のことば：「首尾一貫」（始めから終わりまで、考え方や行動が変わらないこと）。

【書き下し文を書いたら確かめること】

- 白文の字がぬけていないか（書かないのは置き字だけ。ひらがなにした字も数に入れて、一字ずつ照らし合わせる）。
- 送り仮名をひらがなにしたか。打ち消しの「不・弗」、「之（の）」「与（と）」「也（なり）」をひらがなにしたか。
- 歴史的仮名遣いのまま書いたか（書き下し文では、「曰はく」を「曰わく」に直さない）。